

## ソフトカプセル、効率生産に磨き 三生医薬、富士宮の新工場稼働 海外販売拡大へ基幹拠点に

2018/5/17付 | 日本経済新聞 地域経済

健康食品などに使われるソフトカプセル製造で国内最大手の三生（さんしょう）医薬（静岡県富士市）は17日、静岡県富士宮市の南陵工場を稼働する。年間30億粒を生産し、生産能力を5割、生産性を3割高める。人手不足に対応した工夫を随所に取り入れた。ファンド傘下での海外事業の本格展開に向けて、基幹拠点と位置づける。

16日までに完成した。投資額は約70億円。延べ床面積は1万700平方メートル。三生医薬によると、ソフトカプセルでは国内最大級の生産量を誇るという。同社はソフトカプセルで25%（推計）近いシェアを握る。

工場の見学通路を歩くと、作業場を取り囲むような生産ラインの設計が目につく。2階から1階へと工程が進むにつれて、ソフトカプセルの皮膜の成型と、中身の調合、充填までの作業を切れ目なくこなす。稲吉紳次工場長は「面積は2倍だが、移動量は1割減った」と胸を張る。

3千～5千種という機能性素材の原料は自動倉庫で保管。異物や変形を自動検知する外観検査用の機器も導入した。その結果、「雇用人員は増産量ほど増えていない」（同社）という。

新工場の狙いは国外での販売拡大にある。同社は14年に世界的なファンド、カーライル・グループの傘下に入り、海外展開を加速している。これまで4～5人の外部登用を含む10人の海外営業担当者を増員。「海外で飛び込み営業ができる人材を集めた」（松村誠一郎会長）。経営陣にも外部人材が並ぶ。

海外に拠点はなく、各地でカーライルのネットワークを通じて取引先の開拓に支援を得る。日本製というブランド力を武器に対売上高は2ケタ増のペース。海外で需要が高まる認知機能の改善効果があるとされる成分や植物性のソフトカプセルを売りこみ、3年後に海外売上高を50億円としたい考えだ。

健康食品は海外でも競争が激しいという。新工場での生産性に磨きをかけて、「稼げる工場」に育てることができるかどうかは、同社の国際戦略の行方を左右する。

（中村雄貴）

許諾番号30062968 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。